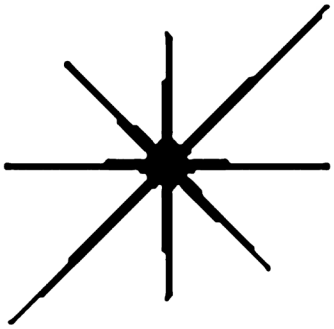
コメット通信 37

［’23 年 8 月号特別付録］



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

変声譚 6

中村邦生

23　明日ぬ天気や如何ないが，うぬ心配どぅやる（明日の天気が気になるぜ）

沖縄の M 大学でのレクチャーを翌日に控え，作家 N は初冬の午後の海岸を散策中だった。北部の名護湾，浜辺に木々の密集した小山があり，近づくと「大瀬原龍神社」と立札が立っているものの，社らしきものは見当たらない。藪の暗がりを覗くと，黒猫が置物のように動かずにいた。

神社を右へ回り込むと，名護湾を見渡す草地に二人の男が坐り，大声の遣り取りが聞こえてきた。何やらベケットの『ゴドーを待ちながら』のウラジーミルとエストラゴンを思わせる姿だった。

二人の話はウチナーグチ（沖縄語／琉球語）ではなく，標準語だった。この「標準」の意味に，N はかねてより居心地の悪さを感じているので，「自分に理解できる程度の表現」と，あえて曖昧にしておきたい。二人の会話は，相手の言葉に応じるような，応じないような，つながるような，外れるような，愉快なちぐはぐ感で進んだ。私は背後の草原に腰を下ろし，この名護湾のウラジーミルとエストラゴンの遣り取りを書きとめた。

やがて背後のこちらの様子に気づいた気配があったので，N は席を立ち，同じ順路で木々の茂みに囲まれた「大瀬原龍神社」の右から大きく回り込み，名護湾を見渡す草地に戻ろうとした。ところがその途中，午後の遅い太陽の位置のはずなのに，なぜか東の方から陽ざしをあびた。方位感覚に狂いを生じたのか，海を臨む遠くのホテルの建物も背後からの光りに浮き立っているように見えた。潮風も逆光の粒子を運び，肌を撫でて過ぎる。

逆光を強くあびると意識の惑乱を引き起こすことがあるのだ。長く続いたとは思えないのだが，はたしてどれくらいの時間だったのか。たとえ錯覚であれ，N は逆光に酔う気分のまま，相変わらず同じ場所で同じように大声で話をしている二人の男に目がいった。

一人は青の地につる草をあしらったカリユシを着ている。70 歳くらい（A とする）。もう一人の男はポロシャツを着て，首にタオルを巻き，つばの狭い麦藁帽をかぶっている。60 代半ばくらい（B とする）。

前と異なり，二人の男の遣り取りはウチナーグチに切り替わっていた。N は先と同じあたりの草地に坐って，ふたたび男たちの話に耳を傾けた。斑に意味の推測できる言葉が耳に飛び込んでくるものの，ほとんど理解できない。それでも粘りつきつつも弾むような会話に心惹かれて，N は音声をスマホに記録しておいた。

後日，N はこの音声記録を名桜大学で長く学長を務めた本部町生まれの山里勝己氏にテクスト化してもらった。すると山里氏のネイティブならではの言語感覚をへて，まるで沖縄の空気をたっぷり呼吸しているかのような会話体が浮かび上がった。それをさらに氏の助言を受けながら「標準語」への変換を試みた。結果，驚いたことに，最初に N が彼らの話を書きとったものと実によく似た遣り取りが出現したのである。まるで二人の役者が同じ台本を地声と声色とに分けて演じたかのようだった。ことによると，似たように感じたのは，作家 N の脳髄に逆光の酩酊が残っていたせいかもしれない。いや，それはどうなのか，きっと本人にもわからないであろう。

沖縄名護湾の男二人が，かく語る。

A　我(わ)んねぇ，明日(あちやー)や如何(ちやー)なとうが，わからんやぁ。朝起(あさう)きてぃ見(ん)ちゃれー，あいっ，何(ぬう)なとーが，我(わ)んねー死んでるさーみたいに，なってるかもわからんやー。
〈おれなんか，明日になりゃ，どうなっているか，わかったもんじゃねえよ。朝起きてみたら，おっ，何だおれ，死んでるじゃねえか，なんていうことだってあるかもしれねえ。〉

B　やくとぅ，うりが何(ぬー)やが。何処(ま)にんあいる話どぅやる。誰(だー)やてぃん，後(あとう)からどぅわかいる，先(さち)にうりがわかいる者(むん)ぬ居(う)がやー。聞(ち)ちゃるくとぅやねーらん。
〈だから，どうだっていうんだよ。よくある話じゃねえかい。誰だって，みんな，後から気づくんだよ。先に気づくやつのことなんか，聞いたことはねえさ。〉

A　うんな話やあらん。明日(あちやー)ぬくとぅよー。明日(あちやー)やどうなりますかねーんでぃる話どぅやる。
〈そんなことが言いたいじゃないぜ。明日のことよ，明日はどうなるかだよ。〉

B　バカタレ，我(わ)んねー，明日(あちやー)や関係ねーん，昨日(ちぬー)ん何(ぬー)がさら，覚(うぴ)てーうらん。
〈ばかいえ，おれなんか，明日なんか関係ねえ，昨日だって，何がどうしたかわからねえくらいだ。〉

A　昨日(ちぬー)ぬ事(くとう)なんか，なんで，どうでもいいさー。昨日(ちぬー)や，過ぎてぃ行んじゃーい，何処(ま)にん無(ねー)らんなとーんど。明日(あちやー)よ，うぬ明日(あちやー)が，困(くま)いむんやんやー。明日や如何(ちやー)がないら，じぇんじぇんわからん。
〈昨日なんか，どうでもいいじゃねえかよ。昨日なんか，もう過ぎてどこにもありねーんだから，どうでもいいじゃねえか。明日よ，明日というやつが，困るのよ。どうなるか，わかったもんじゃねー。〉

B　くだらん悩(うむやみー)だね？　あんた，昨日(ちぬー)や，何処(ま)にん無(ねー)んでぃ言いたんやー。昨日(ちぬー)ぬ無(ねー)らんでー，明日(あちやー)ん無(ねー)らんど。まちがとーみ？
〈くだらねえ，悩みだな。あのよ，あんた，昨日なんか，もうどこにもありゃしねえって，言ったな。昨日がねえなら，明日だって，ねえだろうが。違うか。〉

A　狂(ふ)り物(むぬ)言いし，天気予報(てんきよほうん)見ちんでぃ。昨日(ちぬー)ぬ天気(うわあーちち)ぬくとぅや何処(ま)にん無(ねー)らんど。昨日(ちぬー)ぬくとぅや，どうでもいいわけ。昨日(ちぬー)ぬ天気ぬくとぅまでぃ気にする者(むん)やうらんさ。明日(あちやー)ぬ天気や如何(ちやー)ないが，うぬ心配(しわ)どぅやる。うりと同(ゆむむん)じやさ。
〈ばかいえ，天気予報，見てみろ，昨日の天気のことなんか言ってねえだろう。昨日なんか，どうだっていいさ，明日の天気がどうなるかだ，昨日の天気なんか，わざわざ気にするやつはいないよ。心配なのは明日の天気だろうが。それと同じよ。〉

B　いゃーよー，フラー物言いし。天気や無(ねー)んてぃんしむん。無(ねー)んなてぃん，我(わ)んねー，じぇんじぇん困(くま)らん。
〈あんた，くだらねえこと言うな。天気なんか，どうだっていいさ。天気なんか，なくなったっていいくれえだ。なくたって，おれはぜんぜん困らねえ。〉

A　フリ物言いやすなけー。無んてぃん済むしや，天気やあらん，いゃー頭ぬ中身どぅやる。第一によ，なぁ終わたるむんや，終わたるむん。終わたるむんや，なぁ何処にん無らん。うぬ理屈や，いゃー頭やてぃんわかいらや？
〈ばかいえ，なくていいのは，天気じゃねえ。お前の頭の中身だ。第一よ，もう終わっちまったものは，終わっちまったわけで，終わっちまったものは，もうないんだ。そういう理屈ぐらい，わかるだろう，その頭でもな。〉

B　あい，そうねぇ，理屈使てぃちゅーさや。あんやれー，あね，聞ちゅしが，いゃーや，埼玉ぬ工場んじ働ちょーたる時ぬ，あぬ昔ぬ女ぬくとうゃ気にならんな？　あんすしぇーましやたん，かんすしぇーましやたん，あねーあらん，くれーあらんでぃち，過ぎたるくとぅ，肝痛みーすらや？　やしが，なぁ，いゃーハゴー趣味やれー，大概ぬ女やバイバイすんやー。シャワー入らんけー，いゃー臭さる胴ぬ嗅しー欲さん，と言ったってねー。あきさみよぉ，よくも三年も続いたねぇ。
〈おう，そうか，理屈でくるか。なら，きくけどさ，あんた，埼玉の工場で働いていたときの，あの昔の女のことは気にならねえのか？　ああすりゃ，よかった，こうすりゃ，よかったって，あーだ，こーだって，過ぎたこと，くよくよするだろう。でも，まあ，あんたの気持ち悪い趣味じゃ，たいていの女はバイバイしたくなるさ。シャワー浴びるな，くさい体の臭いを嗅ぐのが好きなんだよなんて，言っちゃたらよ。よくもまあ，それで3年も続いたもんだ。〉

A　バカ小ひゃー，つまらん話やすなけー。3年あらん，4年やたん。女とーじぇんじぇん縁ぬ無ん奴や黙とーけー。
〈ばかいえ，つまらん話を持ちだししやがって，まったくよ。3年じゃなくて4年だ。お前みたいに女とぜんぜん縁がなかったやつに言われたくないね。〉

B　バカタレ，くぬ，穢り爺いが。じぇんじぇん無たんというわけではないよ。両手ぬ指ぬあたいや，ゐナグや居たん。
〈ばかたれ，このくそじじい，ぜんぜんなかったというわけじゃないぜ，両手の指の数くらいは，あらーな。〉

A　いゃーん，爺いやあらに。早く後生んかい行けー。両手ぬ指？　見栄張とうさや。なぁ，女ぬ話や済むん。我ん肝にかかとーるむぬや，明日ぬ天気。
〈おまえだって，じじいだろうが。くたばりそこないめ。両手の指だってか？　まあ，見栄はいくらでも張れるさ。でも，まあ，いいよ，女の話なんて，もうどうだっていい。明日の天気の方が気になるぜ。〉

B　明日，あちゃーし，いゃーやかしまさぬ。放ん投なぎとーてぃん，あちゃーやあまから勝手に来ん。放ん投ぎとーけー。くれー，気張てぃ待っちゅるむんやあらん。ありくり心配するむのーあらん。
〈あした，あしたって，うるさいやつだな。ほっておいたって，あしたっていうやつは，向こうから勝手に来るんだから，ほっておけばいいんだ。わざわざ気を張って待ちかまえていたり，どうなるか，あれこれ心配することじゃねえだろうが。〉

A　いゃーや，ノー天気な者，気楽やんやー。頭ぬ中や，雲一ん無らん，空っぽぬ晴れ，ハリ，ハリどぅやくとぅやぁ。いゃぁ如るむんが，あちゃーぬ天気ぬ心配せーからー，ティーダん驚ち，あきさみよー！　屁放んてーひゃー！
〈おまえみたいにノー天気なやつは，気楽でいいよな。なにしろ，頭のなかはいつだって雲一つねえ，空っぽの晴れ，晴れ，晴れだもんな。考えてみりゃ，そんなやつが明日の天気なんか心配したら，おてんとうさまもびっくりして，屁こくぜ。〉

B　あいっ，何がやら，我んねー褒らったんねーすっさー。ティーダぬ屁放んでぃせー，如何ねーるむんやが。面白い！　あんやれー，我んにん明日ぬ天気ぬしわすんどー。
〈おう，何かほめられた感じがするけど，そうなのか？　おてんとうさまの屁がどんなもんか，ぜひ知りたいぜ。おもしれーじゃねえか，そんならよ，おれも明日の天気，どうなるか気にしてみるか。〉

A　……

B　いぇー，何やが？
〈おい，どうしたい？〉

A　あまんかい座ち，ペットボトルぬ水飲どーる奴よー，あれーきっさから我たー話聞ち，何がやらブツブツ言ちょーねーらに？
〈あそこに坐って，いまペットボトルの水飲んでるやつな，さっきからおれたちの話を聞いて，ぶつぶつ何か言ってないか？〉

B　あれー，「ゆがふいん」かい泊まとーる客やるはじ。
〈ああ，「ゆがふいん」に泊まってる客だろうよ。〉

A　うんなくとぅや済むん。あれー，我たーんかい何言ちょーたが？
〈そんなことはどうでもいいぜ。ぶつぶつおれたちに何を言ってたんだ，あいつは。〉

B　明日，昨日ぬ事やあらん，今日ぬくとぅや如何なとーがんでぃ，言わなかったか？
〈明日とか，昨日とかじゃなくて，今日のことはどうなんだ，とか聞こえたぜ。〉

A　何が，いゃーやわかとーてーさや？
〈なんだ，おまえ，知ってたのか？〉

B　あらんよー，はっきりやわからんしが，うぬ風情ぬくとぅ，言っていたんじゃなかったかねーと思ったわけよ。はいっ，もう帰りましょうね。
〈いやー，まあ，そんなこと言ってたような気がしたわけよ。じゃ，そろそろ帰るか。〉

A　やさ。西ぬ空から，何がやら嫌な雲ぬ出てぃちょーんやー。帰み。
〈ああ。西のほうの空，何だか嫌な雲が出てきたな。帰るか。〉

B　あいっ，何(ぬー)やが，あぬ編隊や。スクランブル発進したよー。まーんかい向かとうーが。
〈おっ，何だ，あの編隊，スクランブル発進したな。どこに向かってんだ。〉

A　知らん。まーがらや，まーがら，いちやてぃん，まーがらや，まーがら。
〈知らん，どこかは，どこかで，いつだってどこかはどこかだ。〉

B　あいっ，くぬ風(かじ)ぬ後(あとう)から雨(あみ)ぬ追(うー)てぃ来(ちゅー)んどー。いゃーや，今日(ちゅー)ぬくぬ後(あとう)ぬ天気(うわーちち)，如何(ちやー)がないら，わかいみ？
〈おっ，この風は雨が来るぜ。あんた，今日のこの先の天気はどうなるか分かるか？〉

A　大概(てーげー)や，雨(あみ)とぅ風(かじ)やんやー。
〈たぶん，雨と風だろうよ。〉

B　ぬーが，うぬ程度(あたい)やらー，誰(たー)にんわかいん。とお，あんせー，ついでに聞(ち)ちゅしが，心配(しわ)なさっている，明日(あちやー)ーぬ天気や，ちゃーなりますかね。
〈なんだ，そんな程度なら，誰だってわかるぜ。ついでに聞くが，ご心配している明日の天気はどうなんでしょうかね？〉

A　なぁ，かしまさぬ，わからん！　我んねー，先(さち)なてぃ帰(けー)いんどー。
〈うるせい，知らねえよ。先に帰るぞ。〉

B　いぇー，また戦闘機がスクランブルし飛(とう)でぃ行ちゅんどー。まーかい向かとーが？
〈おう，また戦闘機がスクランブル発進してるぜ。どこに向かってんだ？〉

A　やくとぅ，まーがらやまーがらやさ。
〈だから，どこかはどこかだよ。〉

24　魂など取り戻しに行けない

詩人のＳ氏が，かく語る。

――暑気払いの怪談話をお望みとのことですが，あいにくご期待にはこたえられません。友人の作家Ｎと違って，そもそも私はゴーストなどにあまり関心はないのです。幽霊だの，亡霊だの，もののけだの，出たところで大して怖くもないでしょうよ。私は人間存在の生の深淵を覗くような話にこそ戦慄をおぼえるのです。でも，どういうことか説明し始めるとややこしい問題になりそうなのでやめます。

では，話を始めます。ずいぶん前のことになりますが，ある実験演劇の主宰者のこんな体験談があります。彼のお気に入りの話のひとつでした。

アムステルダムでの公演を終えてロビーに出てくると，オランダの中年女性が私を待っていた。

「ハンスはいま，どうしているのでしょうか？」

「ハンス，と申しますと，どなたで？」
「ハンス・ブルマです。わたしの夫なんですけど」
　彼女の説明はこうだ。アムステルダム中央郵便局の配達員だったハンス・ブルマは，3 年前のある日，二人そろってミクリ・シアターに今夜と同じ東京から来た劇団の『邪宗門』を観にでかけた。劇が始まって間もなく，数人の黒覆面の男たちが，舞台から観客席に降りてきて，夫のハンスを無理矢理ステージの上へ引きずり上げた。
　それからハンスは舞台の上で化粧をほどこされ，衣装も着せられ，劇の中の登場人物にさせられてしまった。彼女は劇の途中で，夫が他の登場人物たちといっしょに，ロープを引っ張る演技を楽しそうにやっているのを見た。
　ところが，芝居が終わってもハンスは戻ってこなかった。2 時間ほど待って，彼女は楽屋を訪ねたが，劇団員たちはすでにホテルに帰った後だった。その夜，ハンスは帰宅しなかった。次の夜も，また次の夜も，帰らなかった。劇団はオランダからドイツに移動したが，彼女は夫の演技力が評価されて，劇団入りしたのかもしれないと思った。ずっと，劇の中にいるのだ，と。
　3 年たち，夫を返して欲しいと言われた私は，自分も劇団員もハンス・ブルマなるオランダ人を知らないし，同居の事実もないと答えた。彼女は泣き顔になって，「それなら，いまハンスはどこにいるのでしょうか？」と訊いた。それは誰も判らない。
　3 年前，劇の中で蒸発してしまった中年のオランダの郵便配達員。ハンスは劇の中に消えていき，劇の中から消えていった。彼はいまどこにいるのか？

　この行方不明のミステリーは，演劇実験室・天井桟敷の寺山修司がかつて『演劇論集』に書いた話をなぞったものです。「どこまでが劇で，どこまでが現実だったのかを論じることは，この場合には無意味であろう」と寺山が言うとおり，虚実はメビウスの輪のように反転します。
　古い話になりますが，私は渋谷公会堂でこの『邪宗門』を観たことがあります。たしか一回だけの公演ではなかったでしょうか。もはや記憶に濃霧がかかっていて，すべてが朧げなのですが，公演日が 1972 年の 1 月だったことは思い出せます。なぜなら，一緒に出掛けた N が記憶していたからです。彼はそのころ都市出版社の編集者で，ジェイムズ・ジョイスの『フィネガン徹夜祭』の刊行を終えたばかりで，次に寺山修司アフォリズム集の企画を考えていたのでした。でも，正確な公演日はともかく，芝居が始まる前の異様な光景だけは覚えています。
　開演時間が大幅に過ぎてもホールの入口は閉じたままです。しだいに観客たちが騒ぎ出し，抗議の叫び声をあげながら扉を蹴る者までいる始末でした。すると突然，黒装束の男たちが公会堂から飛び出してきて，客たちに罵声を浴びせながら，ゲバ棒のようなものを振り回しながら，客席へと追い立てます。何が起こったのか判らないまま悲鳴を上げるものもいて，誰もがパニック状態で会場に入ると，すでに J・A シーザーの呪術的な音楽が鳴っています。冒頭は「狂女節」だったでしょうか。静かに観劇する気分などなく，興奮がおさまらない状態ですから，話の流れもつかめない。隣の N に小声で説明を求めても，「後で言う」とそっけない。でも，後からだって何の解説もなく，終わったとたん，「仕事があるから」とか言って，遅い時間なのにあたふたと代々木の参宮橋の事務所に戻ってしまいました。

　なぜ私がこの話を思い出したのかと言えば，この 5 月にソウルの安国駅近くのアラリオ美術館での出来事があったからです。実験的な作品を収蔵したモダンアート・ミュージアムで，わざわざ観光客

が立ち寄るところではありません。私も韓国茶を味わいに「韓食文化空間イウム」のカフェに行ったついでに入ったにすぎません。実際，その日も大雨のせいもあって，いま思い出しても他に入館者がいたという印象はないのです。一人をのぞいて。

美術館は 5 階建ですが，フロアごとに部屋の構造が異なっていて，狭く急な螺旋階段を上り，暗い部屋を抜けてトイレのような一角に入ると，そこも展示室で，小さな裸の人形が宙づりになっていたりします。暗い迷路を抜けると，闇の奥に懐かしいナム・ジュン・パイクの茶色の廃車のオブジェが覗いていました。屋根にアンテナのようなものが載っています。「ビデオ･アートの創始者」パイクは，主に 1970 年代終わりから 80 年代までワタリウム美術館，そのころはギャルリー・ワタリと言いましたが，そこでたびたび個展を開いていました。懐かしさはあるものの，パイクと一緒に活動した時期のあるヨーゼフ・ボイスも同じですが，それほど鮮明な記憶はよみがえってきません。

さらに，階段を上り別の部屋に辿り着くと，アンディ・ウォホール，キース・ヘリングとかつて前衛アート・シーンを賑わした人たちの作品に再会しました。

どこのフロアにも人はいません。警備の係員もいないのです。ただし，写真家のシンディ・シャーマンの部屋に入ったときだけは，人の気配がないのに，周囲から視線をあびているような，何か肌がざわざわする思いがしました。変装，異装をしたシャーマンのセルフ・ポートレートに囲まれていたせいにちがいありません。

私は何時間くらい展示室をさまよったのでしょう。受付の若い女性がチケットを手渡しながら，中に入ると簡単には出てこられませんけど，オーケーですか，と英語で謎めいた注意をしたのを思い出しました。

帰ることに決めても，問題は出口でした。順路の矢印を辿って行っても，地下の同じ展示室をぐるぐる回るだけなのです。こういうときこそ，係員が巡回していればいいのですが，どこにもいない。遭難者みたいに大声で助けを呼ぶのは，ちょっと大げさだし恥ずかしい。気を落ち着け，1 階につながる通路を捜しました。そして手すりのついたスロープ状の通路に気づいたとき，突き当りの闇が溜っているコーナーに女性の姿が見えました。すこし安堵があって，あの人の後をついていけばいい，と思い足を速めたのです。

期待した通り，正面に大きな鉄扉があり，「EXIT」と表示が目に入りました。女性は風のような軽い身ごなしで出て行ったのですが，扉を開けた瞬間に差し込んできた光に浮かんだのは，くすんだ紫のドレス姿でした。あれは着くずれたかっこうの老女に変装したシンディ・シャーマンで，自撮り写真から抜け出してきたのではないか，と思ったのは何日も後のことです。

ほとんどの美術館は，出口を抜ければエントランス･ホールに近い場所に戻り，ミュージアム･ショップなどがあるものです。ところが，外に出てみると路地奥のような場所で，錆びついた鉄板に似た色の高いタイル塀で囲まれていました。女性の姿は見えません。とりあえず，右手の明るみの方向に進んでみました。ところが，そこがまた薄暗く迷路のように入り組んでいるのです。

どういうことか？　超現実的なアート作品の並ぶ非日常のミュージアムの空間をさまよい，「EXIT」から日常の現実に戻ったつもりが，そこがまた別の迷路的な非現実の場所への入口だった……，とそんな日常と非日常，虚と実が反転する美術館体験の面白さを考える余裕がひとときありました。

ところが，記憶をたどることのできない夢の中に入り込んだように，ただぼんやりと白濁した印象だけが残っていて，その迷路めいた場所からどのように抜け出し，どのような方法でホテルに帰り着いたか，よく覚えていないのです。気がつくと，ジャケットを着て靴も履いたままベッドに横たわっていました。バスルームから，栓が緩んでいるのか，水の音が細く聞こえます。デスクにはアラリオ

美術館の半券が置いてありました。
　そうした現実感覚とは逆の事態で，たびたび見るあの美術館の夢は，何と鮮やかなことか。奇怪なオブジェや毒々しい色に塗られた絵画と戯れながら美術館をさまよう私はいつだって嬉々としているのです。
　翌日，たしかに私の身体はソウルから東京の自宅に帰りました。でも，私の魂は美術館の迷路のどこかへと失踪してしまったのです。シンディ・シャーマンのポートレートから衣装を借り，白いドレスにたくさんのネックレスをつけて楽しげにポーズをとっているかもしれません。
　連れ戻しに行こうかと思わないこともありません。しかし，ひとたび失踪した魂は見つかった例などないと聞きます。誰が会いに行ってもむだでしょう。人の目に見える魂は，魂ではないのですから。

25　トロのいるところ

　猫のトロが，かく語る。
　――トロです。おぼえている？　ほら埼玉県の入間市のＳ家に飼われていたぶち猫のトロだよ。鼻筋を境目にして八の字に見える，縁起の良いハチワレ模様だった。毛も抜けてやせこけ，死にかかった子猫だったところを，府中の聖公会の牧師家族に拾われて，そのまま居ついた。人の手に触れられた経験がなかったものだから，はじめて司祭の小学２年生の娘に抱きあげられたときは，パニック状態になって腕にかみついたりもした。すぐに教会の皆さんともなじみが増え，楽しい日々がつづいたよ。
　ところが，３年目の夏，牧師一家はイギリスのダーラムに４年も行くことになって，司祭の姉夫妻のところに引き取られた。この家でありがたいことに長いこと大事にかわいがってくれ，少しでも体調を崩すと，獣医さんのところつれていってくれた。迷惑だったのは，このお宅には若い猫どもがすでに３匹もいて，こいつらが実にたちが悪いことだった。おれが寝ていると，その場所を取ろうと爪を立てるトラ猫がいた。他の場所に移ると，同じことを繰り返す。そうかと思うと，両目の上に眉毛みたいに黒毛の固まりのある白いやつが，おれが朝のえさを食べて気持ち良く寝ていたら，横っ面にいきなりパンチを喰らわせてきた。おれはうなり声をあげて，眉毛野郎の喉元に噛みついて引きずりまわした。それいらい，こいつもほかの２匹も恐れをなして近づかなくなった。ところが，この若い３匹，おれよりも早く次々とくたばってしまった。あんなやつらでも，いなくなると淋しかったよ。それから年ごとに動くのが面倒になって食欲も落ち，若い連中が死んで７年たったとき，いつもの寝床でおれの名前のとおりトロトロしていたら，静かに息絶えてしまった。
　いや，いや，こんなことを話したいんじゃなかった。おれの今いるところが，どうもわけが分からないんだよ。猫仲間は１匹もいない。それどころか生き物もいない。いなくても，おれぜんぜんかまわないけど，集まっているのが，実体があるのかないのか，何が何だか見当もつかないものばかりで，気持ち悪くてしかたない。生きているときから，秘密めいた場所はたくさん知っているし，だいたいが心地よいところが多い。でも，いったいここは何なのか，ご多忙のところ申し訳ないが，司祭さんとそのお姉さんのご兄弟なら，教えていただけるかもしれないって思い，こうしてお訊ねしているわけなんだ。いくらなんでも，こんなところに押しこめられちゃ，お先真っ暗だ。ここが明るいというわけでもないけどね。
　まわりを見ると，どうやら「とろ」と呼ぶものばかり集まっている感じだ。いくらトロという名の猫だったにしても，何の理由があってこんな窮屈なところに送られてしまったのか，まったく見当がつかない。

えっ，いま何て言った？　耳が遠いので，もっとはっきり声を出してほしいね。じ？　何だって？おお, そういうこと！　ここは辞書の中だってかい？　まわり？　だから「とろ」ばかりなんだ。さっき使った「とろとろ」もあるな。「吐露」とか「途路」，まぐろの「とろ」もあるな，一度だけ食べたことがあるけど，好みじゃなかった。それからこの「とろ」の意味は何なんだ？　「食べ物屋の上り口に，繁盛しているように装って履物をわざと並べておくこと」だって。とても愉快だね。何だ，この言葉, 作家でも知らないのか。もう死んじまった猫の立場で述べるのも差し出がましいけど,「装って」とか「わざと」なんていう，刺戟的な言葉を聞けば，心が騒いだり，頭がとろめいたりするはずだけれどね。

隣の項目には「登呂」もあるけど，遺跡がある地名だね。地名つながりだと，長瀞の「瀞」もおとなしく収まってるよ。水深があって川の流れが静かなところだそうだ。すこし先には,「とろい」とか「とろくさい」が見えるけど，誤解しないでほしいのだけど，おれの名前の由来じゃないからね。子猫のときに，トロトロ，トロリ，と眠ってばかりいたからつけられたのさ。「トロ」はトロッコの略で, 夏目漱石さんが,「満韓ところどころ」で「トロ」にはじめて乗ったと書いているみたいだよ。もっと先に「とろっぺき」なんて言葉もあって, 泥酔して正体をなくすことらしく, その漱石さんの猫の「吾輩」は，酒のかめに落ちて，溺死したんだっけね。そのうち，会えるかな。いや，でも，こんな狭苦しいところに閉じ込められちゃ，望み薄だ。

また，何か言った？　ああ，そうか，一番肝心なことが残っていた。おれがなぜこんな『広辞明解泉』などという辞書の項目に収容されているか？　えっ，この「トロ」とあるのがおれかい？　「現今の人類の 216 種におよぶ言葉をマスターした，人類初の AI ロボット猫の名前。画期的であったが誤作動も多く, 商品化にいたらず, 試作機のみで終わった」。これ, どういう意味だ？　AI ロボット猫？まったくおれには覚えのないことだ。辞典なのに完全な間違いじゃないか。どこで知った情報なんだろう。とにかく, おれとしては, こんなわけのわからないところに押し込められちゃ, ますます迷惑だ。

えっ，何かな？　もう一度言ってもらえる？　誰かがそのように「装って」「わざと」仕組んでいるのじゃないか？　そいつはいったい誰だい？　つまらんことするもんだ。まさか，あなたじゃないだろうね？

26　ネギと玄米パンと

志村邦彦が，かく語る

（2011 年 3 月，東日本大震災の当時，志村の学生に向けた E メール文書を復元した）。

――みんなの無事を確認し終えたところで，受講生の A・T さんからメールが届きました。不安，怯え，怒り，焦り，そして名づけようのない感情に突き動かされ，翻弄されていることは，私自身もそうですし，よくわかります。これからの生き方の根源的な問題とどうしたって結びつけてしまいます。メールのなかで,「今までの何気ない日常がいかに貴重なものであったか，これほど実感したことはありません」とありますが，誰もが強く思い抱くことですね。それだけに凡庸な感慨ではあるかもしれません。しかし，この凡庸さに潜む意味の深淵は底知れぬものがあります。

それでも月日が経つとどうなるか。そうした実感は希薄になり，やがて貴重な教訓もが脇に放置されたまま，記憶がかすんでしまうことは容易に想像できます。深刻な問題が山積していても，私たちはきっと 10 年もすれば何事もなかったように日々を送るでしょう。こんな予測は外れるほうがいいのですが，たぶん当たると私は思います。2021 年ころはどうなっているか。いや，10 年もたたない

うちにそうなるかもしれません。

あまり活気が出るような話ではありませんが，また別の恐るべき異変の出現が以前の危機を上書してしまう。そして日常への同じ感慨が繰り返されることになる。やがてその先に何が待ち構えているか……。いや，私が言いたかったのは，このような未来予測めいたことではありません。整理のつかない思いを慌しく口軽に述べるのは控えて，ここでは私の経験した出来事をそのまま記すことにします。

3 月 11 日午後 2 時 46 分，私は東武東上線の朝霞駅から自宅に向かうバスのなかにいました。税務大学校の研修所を過ぎ，自衛隊の基地を左右に見る信号機のない直線道路でスピードが上がったとき，急ブレーキがかかり，車体がやや左に傾いたまま宙に浮いた気がしたのです。衝撃はないのに，私はとっさに事故だと速断しました。

停車したものの，バスは激しく揺れている。木々が枝を振り，電柱が左右にぐらつく。激しさを増していく振動に，「ついに来たか」と思いながら座席の背にしがみついているとき，私の斜め前にいた 20 歳くらいの女性が，「やた，やだ，こわい，やだ」と声を上げてから，言葉にならない叫びとともに，泣きはじめたのです。

女性のパニック状態は乗客たちの間に新たな不安を増幅させ，運転手の「救急車，呼びましょうか？」という問いかけも間の抜けたものにするほどでした。地震の揺れが収まっても，娘さんの不安の叫びは続き，私が「もう終わったから大丈夫ですよ」と声をかけても，耳に入らない様子だったのです。このとき，前の座席から小柄な中年の女性が静かに近づき，中腰で娘さんを抱くようにして背中をさすりながら励ましました。

「ゆっくり息を吐いて，それから自分の吐き出した空気を，そっくり取り戻すように吸い込んでみて，そう，ゆっくりでいいのよ。……ほうら，楽になってきたでしょう。じゃ，もう一度やってみて」。

乗客たちに安堵の表情が広がったころ，最後部にいた厳つい雰囲気を漂わせる 50 歳くらいの男が，携帯電話で緊急放送を大音量で流しはじめ，車内にアナウンサーの緊迫した声が広がりました。それを耳にした若い女性にまた異変が現われたのです。

私は男に向かって，「大きな音で聞きたけりゃ，バスを降りなさい」と注意したとたん，「ばかやろう，何が起こったか情報が大事だろうが」と男が凄みました。すかさず，中年の女性は「ごめんなさいね。音を大きくするの，少しだけ我慢していただけますか。よろしくお願いいたします」と穏やかな声で頼んだ。男は素直に従い，娘さんも落ち着きを取り戻したのです。

運転は再開され，三つほど先の停留所で，小柄な中年の女性は何事もなかったように，無言のままこちらを振り向きもせず，バスを降りていった。降車口に立ったとき，買物袋から青々としたネギが突き出て，玄米パンのパックが覗いていた。たぶん，娘さんへの対応は医療関係者の職業的な冷静さだったのかもしれません。しかし見通しのきかない危機的な状況が進むなかにあって，私はこの女性が身にまとっていた静謐な空気をたびたび思い出します。同時に，あの青ネギと玄米パンがゆるぎない日常の濃密な表象のようにも感じられてくるのです。

27　椎の実が落ちる音を聞く夜

東日本大震災当時，志村邦彦の公開講座を受講していた高校の国語教師の A・T が，かく語る。

――荒瀬の騒ぐような雨音が去り，陽射しが戻った。窓を開けると，隣の家からテレビの音が聞こえてきた。高く伸びきった女性の歌声が終わるやいなや，鐘が二つ鳴り，拍手がおこる。

日曜日の昼,「のど自慢」の時間になると，隣の老夫婦はきまってテレビの音量をあげるのだ。私の家でも同じ番組を見ていたりすると，音にエコーがかかって共鳴状態になる。
「先月初めの新聞，知らない？」
と私は床に新聞に束を広げながら母に言った。
「4 月のなら，古紙回収に出しちゃったと思うけど。記事ならインターネットで探せるでしょう？」
母は片づけの手際よさを誇っているような口調で応じた。
「覚えていない？　ほら，お母さん，言っていたじゃない。大震災の報道で，これほど心を打たれたものはないって」
「もうどの話だかわからないわよ。なに読んでも,涙がでたり,あきれたり,怒ったりしているからね」
「避難勧告の出ていた浪江町の人だったか，2 時間だけ帰宅が許された日があったでしょう？」
「そう，そう，あれか，台所で食器を洗い始めた，あの私と同年代くらいの女性のことね」
「たった 2 時間しか滞在時間がないのに，家に戻ってまっさきにしたことが，食器洗いだったなんて。急いで避難したんで，放置したままの洗いものが，ずっと気になっていたんだと思う。あのほっとしたようにお皿を洗っている写真を見て，お母さん何度も溜息をもらしてたでしょう」
「だって，すごい話だったじゃない」
「あの記事，志村先生のエッセイの課題と何か関係があるような気がして，急に思い出したの」
先週の講座で先生が取り上げたのは，カフカの小品「ロビンソン･クルーソー」（池内紀訳）だった。難破して無人島に漂着したクルーソーが，わずかな道具を頼りに 28 年間の自給自足の生活を送る 18 世紀初めのイギリス小説。この作品にカフカはユニークな寓話的解釈をしている。
どうしてロビンソン・クルーソーは，生き延びることができたのか？　それは彼が「島の中のもっとも高い一点，より正確には，もっとも見晴らしのきく一点」に留まり続けなかったからだ，と。慰めであれ，恐ろしさであれ，理由はともかく，見晴らしのよい場所から沖合をとおる船を待って遠くを眺めていたら,「彼はいち早く，くたばっていた」のだ。では，代わりに何をしたのだろう？ 「島の調査にとりかかり，またそれを楽しんだ」のである。命をながらえることができたのは，日常生活へのたくましいほどの拘りと，あくなき好奇心によってだった。
このカフカの解釈に先生は，こう説明を加えた。
〈危機にある人は誰でも，先行きを見通せる高みの場所からの展望をせっかちに求めてしまいます。でも，そここそが迷妄にみちた予測にあふれ，根拠のない楽観論が行き交い，結局はあらたな失望が繰り返えされるのですね。むしろ自分の身近な日常的生活へのたくましい執着と発見の喜びこそが，生きる意欲を生み出すのだと思います。〉
カフカの寓話の教えと貴重な時間に食器洗いを始めた女性の話とどこか深いところで結びついている気がする。
記事の載った新聞は見つからないので，図書館で調べることにした。いったん，カフカの寓話から離れて,同じ社会人聴講生の Y 介さんの貸してくれた室生犀星の『愛の詩集』を読み始めた。愛をテーマにした本を渡して自分の気持ちを伝えようとする，そうした Y 介さんのちょっと古風でぎこちない率直さが私は嫌いではない。しかし，会っていても彼の方が三歳年下だから，生意気な弟を相手にしている気分になる。私は一人っ子のせいか，お姉さんの立場を楽しみたいのかもしれないと思ったりする。Y 介さんがいつも一方的に話し，私はゆったりと聞き役をつとめているのだ。
すぐに気づいたことだけど，生きることの深い哀傷にみちたこの詩集は，愛する人と読むのにふさわしいかどうか大いに疑わしい。私は妻子のいる 20 歳ほど年上の予備校講師とのややこしい恋愛

を終わらせたばかりだった。そのことをＹ介さんは知っているので，ことによると彼なりの深慮が働いているのかもしれない。もしそうだとすれば，その純な行為自体が痛ましく感じられる。しかし，そうした思いがすべて遠のいてしまう一篇の詩が私の心に沁み込んできた。
タイトルは「初めて『カラマゾフの兄弟』を読んだ晩のこと」。

私はふと心をすまして
その晩も椎の実が屋根の上に
時をおいて撥かれる音をきいた

犀星はドストエフスキーの『カラマゾフの兄弟』を読み終えた晩のことをそう静かに歌い出す。椎の実は小石を遠くから打ったように，「侘しく雨戸を叩くことがあった」と。
靄が深くたちこめる郊外の夜，湿った庭の土の上にも椎の実は落ちてくる。「人間の微かな足音」が，「温かい静かなしかも内気な歩み」であたりに忍び寄ってくるように。
詩人は書物を閉じて，庭の靄を眺める。
暖かい晩だ。靄は生き物のように大地と木々の梢にかかっている。そして，目に前に落ちてくる「愛すべき孤独な小さな音響」に耳をすます。
都会のはずれの町，農家の離れの一室。父を亡くし，郷里から戻ったばかりの詩人は，ひとり座している。結びは――

あたかも自らがその生涯の央ばにたつて
しかも「苦しんだ芸術」に
あとの生涯をゆだねつくそうと心に決めた
深い晩のことであつた

年譜を確かめると，「東京市外田端町」の住まいだったらしい。犀星は 29 歳の秋に金沢の養父を亡くしている。望まれない子として生まれた犀星は，誕生後すぐに近所の住職にもらわれていった。
私はこの詩の描くような小説の読み方に強く心を奪われた。ドストエフスキーに関して「苦しんだ芸術」と記してあるにすぎず，『カラマゾフの兄弟』についても直接的な感想や批評は一言もない。あるのは，ただ郊外の夜の情景だけだ。しかし，万感が詩人の胸のうちで，熱くわきたっているのだ。そうした想いを静かな郊外の夜の気配のなかに溶け込ませている。
カラマゾフの兄弟たちもまた，犀星とともに，椎の実の落ちる音を聞き，靄に湿った夜の空気に身を浸しているかのようだ。
小説を読み終えた晩の渦巻く感情が，森羅万象の，この宇宙の中に鳴り響く。

執筆者について――
中村邦生（なかむらくにお）　1946 年生まれ。小説家。小社刊行の主な小説には，『チェーホフの夜』（2009 年），『転落譚』（2011 年），『幽明譚』，『ブラック・ノート抄』（いずれも 2022 年）などが，批評には，『未完の小島信夫』（共著，2009 年）がある。